腹黒御曹司の独占欲から逃げられません

～極上の一夜は溺愛のはじまり～

春宮ともみ
Tomomi Harumiya

Eternity
BUNKO

目次

腹黒御曹司の独占欲から逃げられません
～極上の一夜は溺愛のはじまり～　5

書き下ろし番外編
ローズマリーの花冠　337

腹黒御曹司の独占欲から逃げられません

～極上の一夜は溺愛のはじまり～

プロローグ

ファーストキスはレモンの味がする――そう聞いたのは、いつのことだっただろう。

生まれて初めてのキスはやわらかくて、少し湿っていて、アルコールの香りがした。そして何よりも甘く、じんわりと心に染み込んでいくようだった。

合わさった唇から伝わる甘い痺れに、何もかもを委ねてしまいたくなった刹那、あたたかな感触が離れ、少しだけ唇が冷たくなる。ゆっくりとまぶたを開くと、吸い込まれそうなコントラストの強い黒い瞳が麦沢明日香の視界を占領した。

滝嶋誠司のそのはっきりとした二重の目と、彫りの深い顔立ちはまるで外国の映画俳優を見ているかのようだ。すっと通った鼻筋は高く、わずかに開いた薄い唇からは真っ白な歯が見えている。

スーツの上からでもわかるしなやかな筋肉質の体つきをした彼の姿は男らしく、それでいて艶めかしくて色気がある。頼りがいがありそうな凛々しい眉と同じ色をした黒髪は短く切り揃えられていて、それがまた爽やかさを醸し出している。

その背後に見えるスイートルームの豪奢なシャンデリアが、明日香を一気に現実へと引き戻していく。

「どう？」

「……っ」

夜を飼い慣らしたような、彼の漆黒の瞳からじっと見つめられていることに羞恥を覚え、明日香は顔を背けた。頬から耳にかけて熱を帯びていくのを感じる。きっと今、自分の顔は赤く染まっているに違いない。そんな恥ずかしさを隠すように、明日香は腰掛けたソファの隅に逃げながら声を絞り出した。

「ど、どうって言われても……」

「嫌じゃなかった？　気持ち悪かったとか」

正直なところ、嫌ではなかったし、気持ち悪いとも思わなかった。むしろ心地よいと思ったくらいだ。けれど、それを素直に伝えることは憚られた。

男性経験がない。そもそも恋愛経験がないのだと――酔った勢いで目の前の彼にこぼしてしまったのに、初めてのキスを心地よいと感じてしまうだなんて、破廉恥だと思われないだろうか。

「……わからない、そんなこと」

「そっか……じゃあ、もう一度してもいいかな？」

身体の奥まで響くような低く甘い声色が鼓膜を揺らす。明日香はその問いに答えられなかった。

それが肯定を意味する沈黙なのか、それとも否定を意味している沈黙なのか、自分でもよくわからなかった。

再び明日香の顔に影が落ちてくる。今度は目を閉じようと意識する前に、やわらかなものが押し当てられ、先ほどよりも強く唇を食まれる。思わず漏れそうになる吐息を呑み込みながら、明日香はぎゅうと目を閉じた。

触れ合った場所から伝わる熱に思考が奪われる。まるで溶け合ってしまうかのように全身が熱い。心臓の音が、うるさいくらいに大きく響いている気がした。

後頭部でやわらかなシニヨンスタイルに仕上げてもらった黒髪が、一房ふわりと解けた。緩いカールのついた横髪が白い肌を撫で、少しばかりくすぐったく感じてしまう。

「っ……ぅ、んっ……！」

やがて呼吸の仕方がわからなくなり、明日香が酸素を求めて薄く唇を開くと、その隙間からぬるりとした熱い舌先が侵入してくる。咥内を探るように動くそれが、自らのものと絡み合い、くちゅりと湿った音を立てた瞬間、背中をぞくりとしたものが駆け上がった。息継ぎの合間に漏れる吐息や声さえも呑み込むようにして繰り返されるそれに、次第に身体から力が抜けていく。

どれくらいの間、口づけを交わしていたのか――永遠のような一瞬ののち、ようやく唇が解放される。名残を惜しむかのように銀糸が伸び、ふつりと切れた。ぼんやりとした思考のまま視線を上げると、そこには悪戯っぽく微笑む誠司の姿があった。

「……あ」

「ね、わかったでしょ？」

何が、とは聞けない。言葉の意味を理解できないふりをする余裕もない。胸の奥に潜む心臓は、相変わらず激しく脈打っている。

どうして自分は、これほどまでに動揺しているのだろう。

初めて出会ったときからずっと、兄のように慕っていた相手だからだろうか。こうして予期せぬ再会をして、思いがけない展開になってしまったことに戸惑っているだけなのだろうか。

けれど、もっと別の理由があるのだとしたら――その答えを知りたいと思う反面、知ってしまったら戻れないのではないかという不安もある。

「……わからない、よ」

混乱のままに小さく呟いた明日香の言葉は、彼の耳に届いていたらしい。誠司は困ったように笑うと、そっと耳元で囁きかけた。

「じゃぁ、もう一回しよっか」

「……っ！」

耳にかかる吐息がくすぐったい。思わず首を竦めると、クスクスと笑い声が聞こえてきた。

後頭部へと回された手によって、再び顔を寄せられる。明日香が反射的に目を瞑ると、すぐにやわらかいものが唇に押し付けられた。

「ん、……ふ、っ……」

角度を変えながら何度も繰り返される口づけに、明日香は次第に呼吸を忘れていった。苦しさに喘ぐように口を開けば、その隙間からすかさず舌が入り込んでくる。歯列をなぞるように動いたかと思えば、上顎を擦られて、びくりと身体が小さく跳ねる。そのまま舌を絡め取られ、吸い上げられると、頭の芯がじんわりと痺れていくようだった。

身体の奥底から湧き上がるような熱に浮かされていくのは、きっとアルコールのせいだ。

「……っ、あ……」

もうこれ以上はないと思っていた距離なのに、さらに縮まっていくような感覚に陥ってしまう。お互いの唾液が混ざり合う水音が響き、明日香の耳を犯していく。

酸欠と快楽に翻弄され、意識が飛びそうになったところで、ようやく唇が解放された。荒くなった呼吸のままぶたを開けると、苛烈とも呼べるほどの熱を帯びた黒い瞳と視線が絡み合った。

その瞬間、ずくんと胸の奥が大きく疼いた気がした。けれど、明日香はなぜか、誠司から目を逸らすことはできなかった。

「明日香ちゃん」

名前を呼ばれただけで、身体中を電流のような刺激が駆け抜ける。今度こそはっきりと身体の奥で感じ取った甘い痛みに、明日香は自分の心が囚われていく音を確かに聴いてしまう。

「な、何……？」

絞り出した声は掠れて、震えているのが自分でもわかる。誠司は再び顔を寄せると、明日香の耳元に口づけを落とした。

「俺のこと、好きになって。明日の朝まで……いや、今だけでいいから」

甘やかに注がれる言葉に、得体の知れない何かがぞくぞくと背筋を這い上がっていく。

「……っ、ど、どうして……？」

「だって、このままだと、俺はきっと後悔するから。今だけ……俺のものになってよ、明日香ちゃん。そうしたら――明日香ちゃんも『恋』がどんなものか、わかるかもしれないよ？」

「そんなこと……」

わからない、と言いかけて、明日香は言葉を止めた。
本当にわからないのだろうか。
彼に抱いている感情が、あの日から変わることなく『恋心』であること。わからないふりをしているだけで、本当はわかっているのではないか。
たった数時間前に、十数年ぶりの再会を果たして秘めやかに歓喜したことも。
今、彼に求められて嬉しいと感じている自分がいることも。
「ねぇ、お願い。今夜だけでいい。俺を見て。明日香ちゃん……」
縋るような誠司の声色に、明日香はごくりと喉を鳴らした。
ああ、恋に堕ちるというのはこういうことなのかもしれない――

第一章　花曇りの夢

「ただ～いま……」
久方ぶりの玄関に足を踏み入れた途端、リビングの方から年末特番と思しきテレビ番組の音楽が耳朶を打つ。腕時計に視線を落とすと、耳にかけていた髪がさらりと落ちた。明日香が目を落としたガラス製の盤面は、夕方の五時を指している。

今年大ヒットした失恋ソングの聴き慣れたサビ部分が聞こえた。きっとリビングでは毎年恒例のカウントダウンコンサートの中継番組が流れているのだろう。
「あら～、明日香ちゃん、早かったねぇ」
扉越しに聞こえてくる変わらないあたたかな美知代の声に、明日香はトランクケースを上がり框に持ち上げながら声を張り上げる。
「去年みたいに混むかなぁと思って少し早めに家を出たら、思いのほか早く帰ってこれたの～」
昨年は社会人となり初めての年末年始で、帰省ラッシュを甘く見ていたこともあり、ひどく往生してしまった。同じ轍を踏むまいと、念入りに電車とバスの時間を調べて臨んだ今回の帰省。ここ一ヵ月の努力は無事に功を奏したらしい。明日香はほっと胸を撫でおろす。
トランクケースを一旦その場に置いた明日香がリビングの扉を開けると、リビングから繋がるダイニングのテーブルの上には、カセットコンロと土鍋が設置してあり、今夜の夕食のメニューが容易に想像できた。
「やっぱり、今夜はすき焼きなんだね」
大晦日の夜はすき焼きを食べる――それが、明日香が育った麦沢家の恒例行事だった。
「ふふ、明日香ちゃんが帰ってくるなら今日の夕食はすき焼きしかないだろうと思った

のよ」

カウンターキッチンで野菜をトントンと軽快に切りながら穏やかに微笑む養母・美知代の表情に、改めて明日香は『帰ってきたのだ』と実感する。なんとも言えない感情を押し込めるように「ただいま」と再び声を上げながらキャメル色のウールコートを脱いだ。

「おかえりなさい。もうすぐ良和さんも帰ってくるから、荷解きしておいで」

「は～い」

明日香は美知代の言葉に従い、洗面台で布巾を濡らしてトランクケースのキャスターを軽く拭い、玄関から近い自室の扉を開いた。

ほとんどの収納棚を東京の自宅に持っていったので、ベッドしか置かれていないがらんとした空間になっているが、久方ぶりに訪れた自室は、窓から見える隣の住宅と目隠しになっている赤い実が鮮やかなレッドロビンが以前と同じように明日香の目を引く。

――レッドロビンの花言葉は「にぎやか」だって、大学生になってから知ったんだっけ。

今思えば、幼くして何度となく傷ついてきた明日香の心を癒やせるようにという良和の配慮だったのだろう。仕事の合間を縫って、良和が植栽に励んでいたのを昨日のことのように思い出せる。

そして、この家を離れて二年が経とうとしているが、レッドロビンは変わらず丁寧に手入れされているし、明日香の自室も相変わらず綺麗に整えられていた。

「……ありがたい、よねぇ。血は繋がっているとはいえ、私は遠い遠い親戚の子どもなのに……」

良和と美知代の確かな愛情を感じ取れるような気がして、明日香は口元を綻ばせながら荷解きを始める。

化粧品と洋服を分け終えたところで、ふとすき焼きの甘い香りがふわりと鼻腔をくすぐっていく。砂糖が焦げる独特の香りが、明日香の胸にほのかな哀愁を連れて来る。

――お父さま……お母さまが作るすき焼き、大好きだったもんね……

まだ明日香の両親が健在だった頃、母が作るすき焼きが父の一番の好物だった。一年の締めくくりである大晦日の夕食にすき焼きを食べるという習慣を作ったのも、母が日々社長業で忙しくしていた父に向ける愛情の一つだったのだろうと思っている。

両親と過ごした鮮やかな追憶が脳裏を過り、明日香はかすかな息苦しさを覚えた。ふうと小さく息を吐き出して息苦しさを誤魔化し、胸元に寝間着を引き寄せゆっくりと自室から廊下へと足を踏み出す。

美知代の夫で、明日香の育ての父である良和は、明日香の母親である有紀子の従兄にあたる。

明日香の両親は不慮の事故で帰らぬ人となり、様々な出来事を経て、明日香は中部地方に居を構えるこの檀原家に引き取られた。まだ十歳にもならないときのことだ。

それ以来、明日香の生活は穏やかで平安なものだった。転入した地元の小学校、繰り上がりで入学した中学校を卒業したあとは、郊外の女子大附属の高等部を受験して見事合格。そのまま内部進学で大学の英文科に入学。大きな出来事もなく無事に卒業し、就職に伴い上京。現状、大学で学んだ英語力を活かせてはいないものの、平凡で、平坦な——平均的な人生。明日香はそれが何よりもありがたいのだと、身をもって知っていた。

「よしっ。美知代さんのお手伝いをしよう」

これから九連休なのだ。せっかくの長期休暇期間、感傷に浸るのはもったいない。そう心に決めた明日香は自室を出て、寝間着を置こうとして脱衣所の扉を開けた。腰まで伸ばした髪を手首に着けていたヘアゴムで一つに纏め、自宅から持ってきたエプロンを着けつつバタバタとキッチンに向かった。

「美知代さん、手伝うことある？」

腕まくりをすると、カウンターキッチンのシンクで洗い物をする美知代と視線がかち合った。目尻にしわが増えたような気がするものの、とても五十代とは思えないほどの美貌をもつ彼女は、時折ミセス向けのファッション雑誌のモデルをしている。

「じゃあ、お皿と卵をテーブルに出してくれるかしら」

「は～い」

明日香は冷蔵庫に歩み寄り、そこから卵を手に取った。そして隣の食器棚から小鉢を取って卵を入れ、ついでに深めのお皿も引っ張り出してダイニングテーブルに配膳していく。そのとき、テレビの音声がリビングからダイニングにも流れ込んできた。

『さて、実力派シンガーであるセレナさんは、一週間前のクリスマスに共同作曲者の方と電撃婚をされましたね。これからますますご活躍されていくことを一ファンとしてとても楽しみにしています！　それでは、次のアーティストに参りましょう……』

ディスプレイに映し出されているのは、先ほどまで失恋ソングを熱唱していたシンガーソングライターだった。彼女はＳＮＳをまったくしないアーティストのため、デビューから十年以上私生活が表に出てこなかったのだが、つい数日前に突然結婚を発表した。かくいう明日香もＳＮＳの類は登録していないものの、仕事納めだった昨日の職場では人気アーティストのこの話題で持ちきりだった。

「あらやだ、この歌手さん結婚したのね？」

洗い物をしていた美知代がテレビを眺めながらぽつりと呟いた。明日香は思わず手が止まりそうになるが、平静を装って配膳を続けていく。

「結構年齢差があるみたい。五歳差ってワイドショーで言ってたかなぁ」

「この年になると、五つだなんて誤差の範囲だって思うのだけれど、若い子たちにとっては大きいものよね」

「そうだね、会社の先輩でも五歳年上だと随分ジェネレーションギャップがあるなって思うよ」

「あら、そうなの？」

何気ない会話の流れに、明日香は目の前のテーブルにそっと視線を落とした。

明日香はある事件をきっかけに零落した元社長令嬢という身の上のため、学生の頃から無意識のうちに恋愛というものをとことん避けてきた。明日香自身が借金等の負債を抱えているわけではないものの、少し調べれば白日の下に晒される親戚事情があるので、こんなワケありな女と好き好んで結婚しようと思う珍妙な男性はそういないだろうと考えている。そもそも、相手の男も願い下げと思うに違いない。

そうした明日香の考えを良和も美知代も承知しているので、こうした帰省のたびに明日香へ直接「誰かいい人いないの？」などと聞いてくることはない。それでも、明日香は二人がこうしたおめでたいニュースに反応するたび、なんとも言えない申し訳なさとやるせなさが胸の中に広がってしまう。昔から将来に関することは一切言ってこなかった二人だから、おそらく明日香がこの先も一生結婚はしないと決めたとしてもそれを受け入れてくれるだろう。

けれど――それでいいのか、と煩悶する感情が明日香の心の奥に燻っていることも、紛れもない事実だった。

「ああ、そうそう。小西さんから明日香ちゃん宛てにお手紙が届いているのよ」

ある程度温まったらしい土鍋をキッチンから運んでくる美知代が、思い出したと言わんばかりにダイニングテーブルの前で足を止めた。養母から飛び出した思わぬ旧友の名前に、明日香は今度こそ準備を進める手が止まってしまう。

「えっ……小西さんから？」

「お鍋置いたらすぐ持ってくるから、ちょっと待っててね」

美知代はその言葉の通り、手にした土鍋をカセットコンロの上に置き、淡いグリーンのミトンを外すと、リビングの壁にかかっているウォールポケットから空色の封筒を持ち出した。明日香は美知代から差し出された封筒にゆっくりと視線を落とす。

封筒に記された差出人は『小西桃子』となっている。紛れもなく、明日香が通っていた都心の小学校で巡り会った同い年の友人の名前だ。

――近況の報告、かしら……

彼女は明日香が都心を離れ、檀原家に引き取られてからも、時折こうして手紙でやり取りをしている唯一の人物。前回やり取りしたときは、お互いに大学を卒業するタイミングだった。珍しいな、何だろうと思いながら明日香が受け取った手紙を開封すると、手触りの良い便箋が指先に触れる。綺麗に三つ折りにされたそれを広げると、『前略』から始まる文章が流麗な字で丁寧に綴られていた。

『街のあちこちでポインセチアが目につく季節となりました。麦沢さんも変わりないかな？　私は相変わらず仕事に追われる日々を送っているけれど、受付は一日中座っていることが多いから最近は運動不足が気になって、スポーツジムに通い始めました。身体を動かしていると、麦沢さんと体育の授業で一緒にフラフープやジャングルジムをしていた頃を思い出して、とっても懐かしく思っているよ』

「ふふ、懐かしいなぁ……」

綺麗な筆跡ながらもどことなく可愛らしさもある字を懐かしい気持ちで眺めつつしばらく読み進めていくと、とある一文で明日香の視線がぴたりと止まる。

「お式に……招待？」

結婚が決まったので結婚披露宴に出席してほしい――手紙の内容を要約すると、式の招待状を送付する前の確認の便りだったようだ。

結婚は素直にめでたいと思う。彼女はプライム市場上場の大企業の受付嬢として内定をもらっていると言っていたので、そうした繋がりか、はたまた彼女の生家である小西家の閨閥関連かのどちらかだろう。彼女は天然ガスの開発・採取を行っている大手の鉱業会社『小西エナジーグループ』の社長令嬢だ。

明日香は便箋を握り締める指先にわずかに力を入れる。

「あら、小西さん、ご結婚？」

「そうみたい。結婚式には……出たい、けど……」

美知代の問いかけにそこまで言葉を返した明日香は、思わずその先を言い淀んでしまった。

かつて逃げるように都心から離れた例の出来事は、明日香の記憶の中に確かなトラウマとして今も残っていた。けれど、あれからもう二十年が過ぎようとしている。桃子ともこうした手紙のやり取りだけで、実際に顔を合わせた機会はあれから一度もないのだ。友人に会いたいという物悲しさに心が沈むことも時折あった。

手紙を持ったままの明日香の手を、美知代のあたたかな手がゆっくりと包み込んでいく。

「明日香ちゃんが悩んでいるのは叔父さんのことよね？」

美知代のその言葉に明日香はギクリとする。かねてから懸念していたことをずばりと言い当てられたからだ。

あのような大きな事件の関係者である以上、そうした場に出るのはやめておいた方がいいと引き留められるだろうか。明日香は痛む胸を押さえながら、投げかけられた問いにコクリと首肯して美知代の次の言葉を待った。

けれど、続けられた言葉は予想外のものだった。

「叔父さん、結局は最高裁まで争ったけど、執行猶予付きの判決になったのよね。私は

財界とかゼネコン業界に詳しくないからわからないけれど、もう時効に近いと思うの」

明日香の父親は、当時ゼネコンの中でも大手と言われる『麦沢住建株式会社』の社長を務めていた。明日香が八歳のときに有紀子とともに事故死したのち、社長の座と事業を叔父が引き継いだのだが、取引先に広告宣伝費を過大に支払う不正事件を起こして数年で倒産してしまったのだ。

この事件は当時、テレビや新聞をはじめとするマスメディアに大きく報道されたこともあり、両親の葬儀後に叔父に引き取られていた明日香自身の身の安全を考え、麦沢家の縁戚ではなく母方の檀原家に身を移すこととなった。

急な引っ越しだったこと、そして不正事件を起こした人物の親族という身の上だったので、明日香は今現在も当時の友人たちとの交友関係はほぼ断絶状態にある。

そんな明日香にとって、唯一無二の旧友と顔を合わせることができるまたとない機会だ。

「人の噂がうるさくてそうした繋がりのある場に出る気にはなれなかっただろうけれど、もう二十年になるのよ？　気にしなくていいんじゃないかしら、って私は思うわ。それに、あちらのお友達とも随分と会ってないじゃない。きっと同じテーブルになるだろうから、寂しいこともないと思うわよ？」

美知代の穏やかな声音に、明日香は改めて自分の心と向き合った。

桃子と直接会って、今までのことや現在の生活のことを聞きたい。お互いの現状を語り合いたい。

結婚式といった大きな催しとなれば、初等部で一緒だったクラスメイトも出席しているかもしれない。彼女たちとも、久しぶりに会うことができるだろうか。

そんな想いが、過去に躊躇う明日香の決意を後押しした。

「……せっかくだから……出席したい、ってお返事しようかな。でも結婚式って初めてだから、初売りで色々揃えたいの。美知代さん一緒についてきてくれる？」

明日香が顔を上げると、美知代は得意げにウィンクをする。

「ええ、もちろん。とびっきり可愛いのを選んであげる。私も明日香ちゃんと初売りセールに行きたいなと思ってたのよ」

「あはは、私も美知代さんと久しぶりにお買い物行きた～い」

くすくすと笑いながら、明日香は手にした手紙をそっとリビングのテーブルの上に置いた。幼い頃から変わらずに愛情をたっぷり注いでくれている養母の存在は、明日香の心の奥にぽつんと広がった黒い斑点をゆっくりと掻き消してくれるようだった。

＊＊……★……＊＊

アコヤ貝を貼った優美な曲面を描く天井には豪華なシャンデリアが等間隔に吊るされており、『ヴァンセンヌホール』と名付けられた空間を煌々と照らし出していた。

その明かりを反射するように、整然と並べられたカトラリーがまばゆく輝いている。披露宴会場である大広間は、どこを見ても素晴らしいものだった。

今夜の披露宴は、都心の広範囲をカバーしているガス供給会社である『一宮ガス』の御曹司と『小西エナジーグループ』の令嬢の結婚式ということもあり、正餐形式のレイアウトで四百名ほどが招待されて、盛大に開かれていた。

大広間の隅にはカメラマンや大勢の配膳スタッフがせわしなく働いていて、シャンデリアの光とともに、キャンドルのやわらかな明かりがゆらめいている。至るところに設置されたスピーカーから響くしっとりしたクラシックの音楽がとても心地よい。

特別な雰囲気に満ち、着飾った人々であふれ返る老舗高級ホテルの披露宴会場には、招待された人々の歓談の声がなごやかに響いていた。

「麦沢さん、みんなで一緒に記念写真を撮りに行きましょう？　せっかくこうして集まれたのだし」

「ええ、行きましょうか」

同じ円卓の名塚麻子に声をかけられ、明日香は笑顔で応える。麻子は東京で通っていた私立初等部の入学式で偶然隣の席だったので、それなりに親しい関係を築いていた人物だ。招待されていた桃子の友人たちは、美知代が口にした通り明日香の見知った顔ぶればかりだった。

当時通っていたのは初等部から大学院まで一貫教育を行う名門女子校だった。クラス替えなどはなかったため、卒業するまで顔を合わせる機会がない生徒もいたものの、エスカレーター式の学校なので中等部、高等部と顔ぶれはほとんど変わらない。大学は外部入学生がいるものの、その人数は半数ほど。そのため、初等部から十六年間をともに過ごした仲間たちは、大学卒業後も近況報告会という形で定期的に集まってはお茶をしているのだという。

明日香は数人の友人たちとともに、会場の中央にある高砂席に向かう。高砂席には真っ白なタキシード姿の新郎と、綺麗に結われた栗色の髪によく似合う、グリッターとビジューが煌めくウェディングドレスに身を包んだ桃子が笑顔で手を振っていた。二人の前にはたくさんの花々が咲き誇っている。

初等部時代からの親友である桃子は、昔から変わらない快活そうな可愛らしい面立ちに、少し大人っぽさが加わったように見える。それどころか、明日香が覚えていたより

もずっと美しくなっているようにさえ思えた。懐かしさと嬉しさが入り混じった気持ちで、明日香は桃子と微笑みを交わす。

「お久しぶり、小西さん」

「麦沢さん！　遠いのに来てくれてありがとう」

「ううん。私、こっちで就職して一人暮らししているから気にしないで。お招きいただいて嬉しいわ」

明日香が挨拶の言葉を口にすると、桃子も親しげに明日香を呼んだ。明日香の記憶の中の桃子と目の前にいる彼女はやはり同一人物だった。けれど、明日香の知らないところで、彼女がこんなにも眩(まぶ)しい女性になっていたなんて。明日香は自分の記憶の中だけにあった幼かった桃子の姿と今の彼女を重ね合わせながら、胸がいっぱいになるような心地だった。

「小西さん、すごく綺麗になったね。びっくりしたよ」

「ふふ、ありがと。こんなに素敵なドレスを着せてもらって嬉しいんだけど、ちょっと歩きにくいのが難点かなぁ」

桃子は照れた様子で頬を染めながらも、晴れやかな笑みを浮かべた。

確かに、披露宴前にホテル内のチャペルで執り行われた挙式では、プリンセスラインのドレスを着た桃子の足元は、高いハイヒールを履いていることもあるのか覚束ない様

子だった。けれど、そんな仕草さえもどこか愛らしく感じていたので、明日香は思わず頬を緩ませてしまう。

「麦沢さんも昔と変わらず綺麗だね。すっかり大人の女って感じ。羨ましいなあ」

「そうかな……？　自分ではよくわからないけど」

「ううん、前よりもっと美人になってるよ。そのドレスもすごく似合ってる」

明日香は美知代と一緒に選んだ淡いグレーを基調としたフォーマルドレスに、真珠のネックレスを合わせていた。上半身はシンプルだが、スカート部分に施されたレースが華やかさを添えている。髪型は美容室でアップにしてもらい、普段はあまり使わないアイシャドウもラメ入りのものを使ってしっかりとフォーマルな場に合ういでたちになるよう努めたのだ。

美知代と二人で選んで買ったお気に入りのシルバーのパンプスはヒールが高いので足元は少しふらつくけれど、慣れればそれほど苦にならない。

「それにしても、まさかこんな風にみんなで会える日が来るとは思ってなかったわ」

明日香は改めて目の前にいる桃子や麻子を見つめながら感慨深げに呟く。

この二十年余りの間、ずっと連絡を取っていなかったのだから無理もないが、それでも、かつて初等部時代に同じ教室で過ごした仲間たちとの再会にはやはり特別な思いがあった。

「そうだよね。麦沢さんが引っ越したって知ったときは驚いたもの」

明日香の転校は突然のことだったので、桃子たちはもちろんのこと、ほかのクラスメイトたちも別れの言葉を交わすことができなかったのを残念に思っていたらしい。桃子に賛同するように麻子をはじめとする旧友たちも口々に声を上げていく。

「本当、こうして麦沢さんとまた会えるようになってよかったよ。麦沢さんが引っ越す前はよく放課後に遊んでいたのに、急に初等部でも全然見かけなくなって、どうしてるかなって心配していたのよ」

「私も！　麦沢さん、連絡取れないまま引っ越しちゃったでしょ？　だから、今日は麦沢さんとまたお話しできてよかったと思ってるの」

「麦沢さんが引っ越してからも、私もずっと麦沢さんのことが気がかりで……」

友人たちの口から紡がれる言葉の数々。明日香は胸にじんわりと熱いものがこみ上げてくるのを感じた。

桃子や旧友と会って話をしたいと思っていたけれど、一方で当時の関係者と顔を合わせることに不安を感じていたことも事実だ。けれど、いざ会ってみるとすべての人たちが以前と変わらずに接してくれており、そんな懸念はいつの間にか吹き飛んでしまっている。

不適切会計による特別背任罪によって逮捕された叔父は起訴され、判決のたびに控訴

と上告をし、最終的に最高裁判所まで争った。麦沢住建を倒産させた叔父自身が今はどのような生活を送っているのか、明日香自身もわからない。檀原家の尽力もあり、明日香は麦沢家の親類たちとは疎遠になっていて、彼らと明日香が顔を合わせる機会は皆無と言っていい。年に一度、両親のお墓参りに行くときも、彼らと鉢合わせしたことはない。

明日香はあの事件のことを思い出すたびに胸が痛むけれど、叔父一家と会う機会はもう二度とないだろうと思っているし、正直それが最適解だと思っている。

「私も……正直、同窓会とかってもう二度と参加できないかもって思っていたから、こうしてみんなに会えて本当に嬉しい」

明日香は、先ほどの友人との会話の中で、披露宴の席次表の中に自分の名前を見つけて旧友たちは少なからず驚いたと知った。そして、明日香がかつて通っていた初等部の同級生のほとんどが新婦側の友人としてこの場に集まっていることも。その事実が、明日香の心をほんのりとあたためてくれた。

あの事件以来、明日香はそれまで親しかった友人や親戚と一切の関わりを絶った。初等部に通っていた頃は、毎日のように顔を合わせていた友人たちと会うこともなくなった。

そんな明日香の身を案ずる声を耳にするのは、これが初めてのことだ。

「みんなのことを思い出さない日はなかった。だから……とても嬉しいの。みんな本当

にありがとう」

明日香が涙を滲ませた声で礼を告げると、彼女たちは顔を見合わせて嬉しそうに微笑んだ。

「あー、麦沢さん泣かないでよ～」

「ほらほら、写真撮らなきゃ！」

変わらないあたたかさを持った友人たちは口々にそう言って、明日香の背中をぽんと叩く。その優しい気遣いに感謝しながら、明日香は涙でぼやけた視界を拭って笑顔を見せた。

「うん、ごめんなさい。じゃあ、記念写真を撮りましょ」

明日香もつられて笑顔になると、ちょうど新郎新婦のそばにいたカメラマンに声をかけられた。明日香を含めた五人は、みんなで一緒に立って肩を寄せ合った。

明日香はカメラマンに自らのスマートフォンを預け、桃子の隣に並んでカメラに向かって笑顔を向ける。

シャッターを切る軽快な音が、落ち着いた歓談のＢＧＭに紛れて消えていく。

「次はこのスマホでお願いしま～す」

「はい、では視線をこちらに向けて……」

麻子がカメラマンに願い出ると、カメラマンはにこやかな表情でそれを快諾した。再び響くシャッター音とともに、明日香たちの笑顔の写真が画面に切り取られていく。

心の底から幸せな気分にさせてくれる、かけがえのない瞬間だった。

明日香がカメラマンに頭を下げると、麻子がカメラマンから戻されたスマートフォンを確認したのちに明日香の手の中のスマートフォンを指さした。

「あとでグループチャットの方に送るから、麦沢さんのＩＤを教えてほしいな」

「あっ、うん……ちょっと待ってね」

明日香が手に持ったスマートフォンのディスプレイをオンにすると同時に、高砂席の新郎側の席に一人の男性が姿を現した。

すらりと背が高く、目鼻立ちが整った端整な面差しをした男性。その瞬間、明日香の心臓が大きく跳ねる。

――せ……いじ、くん……？

明日香の視界に映ったのは一瞬だけだったが、それでも彼のことをすぐに思い出すことができた。両親が健在だった頃、麦沢住建と親しいある資産家が開いたガーデンパーティーでよく一緒に遊んだ男の子。明日香よりも三つ年上で、年齢こそ幼くとも顔立ちは整っていたので、ひどく大人びた印象があったのを覚えている。

ガーデンパーティーには必ず彼と彼の両親が出席していたため、大人たちが難しい話をしているパーティーの間はお互いに良き遊び相手になっていた。

明日香は驚きで目を丸くしたまま、まじまじと彼の横顔を眺める。すると、彼は明日香の視線に気付いたのか、ゆっくりとこちらを振り向いた。
「あ……」
視線が絡み合った途端、思わず声が漏れてしまう。その瞬間、心臓がドクンと確かな鼓動を大きく刻んだ。
彼はあのときの面影を残したまま、大人の色気を感じさせるような笑みを浮かべて軽く会釈をする。まるで昔と変わらない、幼子に向けるようなやわらかなまなざしだった。
それは、明日香の記憶の中にあった彼とまったく同じもので、明日香はなぜだか胸の奥が小さく締め付けられるような錯覚を抱いた。
「……どうしたの、麦沢さん？」
隣に立つ麻子に小声で訊ねられ、明日香はハッと我に返り、慌てて首を横に振る。
「う、ううん！　何でもない」
明日香はそう答えながらも、どこか落ち着かなかった。
どうしてだろう。久しぶりに会ったというのに、彼に対しては懐かしさや嬉しさよりも先に、なぜか言い知れぬ感情がこみ上げてきた。
彼はなぜ、あんなにも親しげなまなざしで自分を見たのだろうか。
「本当に？　何だかぼうっとしているみたいだけれど……」

「大丈夫。ちょっと昔のことを思い出して懐かしくなっただけなの」
明日香は曖昧に笑って誤魔化すと、再び友人の輪の中に溶け込んでいった。
それから、明日香は桃子や友人たちと話を弾ませながら、ちらりと新郎側の席にも視線を向けてみるものの――すでに彼の姿は、高砂席から消えてしまっていた。

夜も更け、披露宴は無事にお開きを迎えた。二次会へと向かう人々がゆっくりとロビーからはけていく。今日の二次会はこのホテルの最上階にある『レア・ジャルダン』という名のフレンチレストランで開かれるらしい。
「じゃあ、私たちそろそろ行くね」
「今日は楽しかったわ。また近いうちに会いましょうね、麦沢さん」
「もちろん！　また連絡するわ」
麻子をはじめとする旧友たちは、名残惜しそうにしながらも二次会へと向かうため次々と別れの挨拶を交わしていく。
明日香は一人、落ち着いたラグジュアリーなロビーで、エレベーターに乗り込む友人たちの後ろ姿を見送った。
「……ふぅ」
小さく息を吐くと、明日香はロビー奥の小さなカフェに向かった。ロビーは高い吹き

抜けの天井にオレンジ色の光が差し込んでいて、ピカピカに磨き上げられた床に天井から下がる大きなシャンデリアが反射している。

大理石の床と円柱のある高級感あふれるロビーの先にあるカフェにたどり着いた明日香は、店内に配置されているソファに腰を下ろした。

『本日のおすすめ』とメニュー表に書かれたエチオピア産のモカコーヒーを注文すると、コーヒー豆を砕く良い香りが鼻腔をくすぐった。そう時間を置かずしてウェイターの手によってマグカップが運ばれてきたので、明日香はそれにゆっくりと口づける。

――ちょっと……思ったよりも疲れちゃった。楽しかったのは、もちろんだけれど。

旧友たちとの再会にも心が弾んだし、披露宴は滞りなく進んだ。が、その間ずっと、明日香の脳裏には彼の存在が焼き付いて離れなかった。

披露宴の最中、明日香は何度か会場を見回してみたものの、四百名近い招待客の中から彼の姿を探し出すのは困難で、あのあとは結局彼を一度も見かけることができなかった。

そもそも明日香は、幼い頃に面識があった彼が「せいじ」という名前であることしか知らない。明日香は彼のことを「せいじくん」と呼んで慕っていただけだった。

あのガーデンパーティーに参加していたことから、きっと大きな会社の社長子息等ではあるのだろうと思う。あのとき一緒に遊んでいた子どもたちは複数名いたものの、ほぼ全員苗字は知らないし、名前の漢字もわからない。今日再会した彼だって、例外なく名前しか知らない人物だ。

受付で受け取った席次表を眺めてみるものの、「せいじ」という名前の人物が漢字違いで十名ほどいたので、明日香は彼を捜すことを諦めざるを得なかった。

明日香はふぅともう一度短くため息を落とし、両手の中に収まっている黒い水面に視線を落とす。

――あのガーデンパーティーで、せいじくんがローズマリーの花冠を作ってくれたのよね。

当時のことは今でも鮮明に覚えている。当時、明日香はまだ五歳で幼かったけれど、彼が作ってくれた花冠は特別なものだった。

明日香は、あのとき教えてもらった花言葉をしっかりと記憶しており、今も忘れていない。

――誠実、変わらぬ愛、思い出、追憶。それから……初恋。

きっと、あの頃の自分は、彼に初めての恋をしていたのだと思う。

優しくて、何でも知っていて、いつだって明日香の疑問に答えてくれた。空が青い理由、虹ができる仕組み、虫眼鏡で太陽の光を集めると熱くなって火を起こせること――彼は、どんなことも明日香にわかりやすく説明してくれた。

そのことが嬉しくて、楽しくて、彼といる時間が大好きだった。そんな彼のことを知りたくてたまらなかった。

けれど、その思いはもう過去のものにしなければならない。煌びやかな財界から距離を置く今の明日香は、彼のような人と一緒になることはできないからだ。

それに、あれから十年以上が経っていて、彼は今や立派な社会人となっているはずだ。彼の年齢を考えれば、結婚している可能性だったり、恋人がいる可能性の方が高い。

何年も会っていなかった彼への感情は、昔の思い出として昇華させなければ。

――まだ……ちゃんと諦めきれていないからなのかな。彼のことが気になるのは。

ぼんやりとそんなことを考えていると、カフェの入り口に初老の男性が立っていることを視認し、はっと我に返る。

「吉沢(よしざわ)……さん？」

明日香が思わず席を立って声をかけると、男性は驚いたように目を瞬かせたのち、にこりと微笑んで会釈した。記憶の中にある姿とは違う、白髪混じりの髪が二十年という歳月を物語っているようだった。

彼は日夏(ひなつ)銀行という新興勢力の銀行頭取補佐をしていたはず。事業拡大に伴って複数の店舗の建設の入札があり、結果的にすべての店舗の建設を麦沢住建が請け負ったことから父の誘いで何度か自宅で夕食をともにしたことがある。

「……ご無沙汰しています」

少しだけ戸惑いながらそう口にすると、彼はどこか懐かしそうな表情を見せながら、小さくうなずいてみせる。

「えぇ……お久しぶりです。あなたは、麦沢さんのお嬢さんですよね？」

「はい。麦沢明日香と申します」

明日香がぺこりと頭を下げると、吉沢は穏やかに微笑んだ。

「私は麦沢さんのお父さんとは親しくさせてもらっていましたから、ご両親の葬儀のときにも参列させていただいたんです。通夜で泣きじゃくっていたあのときの印象が強かったけれど、元気そうでよかった」

その言葉に、明日香ははっと目を見開いた。

確かに、父と母の葬式が行われた際、多くの弔問(ちょうもん)客が訪れていたので、その中にこの人もいたのかもしれない。あのときの記憶はぼんやりとしていて、はっきりとは思い出せないけれども。

「そうでしたか……父が生前は、本当にありがとうございました」

「いえ、こちらこそ。それにしても……本当に大きくなりましたねぇ。その後は大変だったでしょう。先ほどの披露宴でもしかしてと思ったのですが、こちらから声をかけるのは躊躇われたので……」

「……はい」

明日香は顔を伏せ、俯きがちに答えた。叔父が引き起こした事件は全国中に知れ渡っているのだと改めて突きつけられるような気がして、明日香はずんと心が重くなる。

そんな明日香の心境を知ってか知らずか、吉沢は何かを思い出したかのようにスーツのポケットから一枚の名刺を取り出し、明日香に差し出した。その名刺には、「株式会社日夏銀行　頭取　吉沢康志」と記されている。彼はこの二十年の間で、頭取補佐から頭取に昇進していたらしい。

日夏銀行は順調に成長を続け、一昨年上場したと聞く。今や財界の要人となった吉沢とこんな風に話をする機会など滅多にないことだろうと想像できた。

「もしよかったら、これ、私の携帯番号なのですけど……私で力になれることがあったら、何でも言ってくださいね。お父さんへのご恩もありますから」

「えっ……」

突然の申し出に、明日香は戸惑いを隠せない。過去の繋がりからの恩義で、ただの社交辞令にすぎないのかもしれないけれども、ここで彼の申し出を断ってしまうのは失礼にあたるような気がした。

明日香はぎこちない動作で名刺を受け取り、こくりとうなずく。

「……あ、ありがとうございます」

「では、また」

そう言い残した彼は颯爽とロビーを出ていった。しっかりとした足取りで、エントランスの回転ドアをくぐり抜けていく。

明日香は、彼から手渡された名刺にゆっくりと視線を落とした。そこには、携帯電話の番号に加えメールアドレスまで記載されていた。

「……私がお世話になること、あるのかなぁ」

今はもう、こうした上流階級の人物との接点はほぼ持ち合わせていない。この先の人生で、中堅の人材派遣会社に勤める一般庶民の明日香が、大銀行の頭取を頼るような何かがあることもなさそうだ。彼の厚意はありがたいけれども、無用の長物となりそうな気がする。

明日香は小さく息を吐き出すと、受け取った名刺をしまおうとクラッチバッグから財布を取り出した。その流れでまだほんのりとあたたかいコーヒーを口に含むと、柑橘類を思わせる華やかな香りが鼻腔を抜けていく。

ほぅ、と息を吐くと、その吐息さえも煌びやかなカフェの喧騒に紛れて消えていった。

――そろそろ……帰ろうかしら。

腕時計に視線を落とすと、とうに二十時を回っている。確か、荷物を預けているクロークは二十時半で受け取り終了となっていたような気がする。

明日香はコーヒーを飲み干し席を立ち、ロビーの一角に設置されているクロークへと足を向けた。

クラッチバッグから引き換えの番号札を取り出したところで、明日香はぴたりと足を止める。クロークの目の前には、一人の男性の姿があった。

高級感のあるブラックのスリーピースを纏った、さらりとした艶のある黒髪と綺麗な二重まぶたが目を引く彼の横顔。まるで時間が止まったかのように、明日香は一瞬、呼吸をするのを忘れてしまう。

まさか――披露宴中、ずっと捜し続けていた彼が今、目の前にいるなんて。想像もしていなかった展開に、明日香はその場に佇んだまま動けずにいた。

数秒ののち、目の前の彼は明日香の気配に気が付いたのか、ゆっくりとこちらを振り返った。その瞬間、彼はパッと相好を崩す。

「久しぶり。覚えてる？　俺のこと」

彼は懐かしさを滲ませた声音で言葉を紡ぐと、一歩ずつ明日香の方へ歩み寄ってくる。涼しげな双眼と視線が絡み合った途端、心臓がどくりと跳ね上がるのを感じた。明日香は思わず後ずさりしそうになるものの、なんとか堪えてその場で踏みとどまる。

「久しぶり、だね……せいじくん」

「うん。明日香ちゃんも、元気にしてた？」

「はい……」

明日香は緊張で身体を強張らせながらも、なんとか返事を返した。

彼は、あの頃よりも大人っぽくなったように思う。顔つきも少しシャープになった彼は、どこか野性的で色っぽい雰囲気を纏っている。

クロークに番号札を差し出すと、黒のビジネスバッグと引き出物の紙袋を持った彼は不思議そうに首を傾げた。

「二次会、行かないんだ？」

彼のその仕草で、さらりとした艶のある黒髪が揺れる。なんとも匂い立つ色香を感じた明日香はぎこちなく微笑み、視線を逸らした。

「えぇ……披露宴までと決めていたから」

叔父の一件はほとぼりが冷めているとはいえ、マスメディアに大きく取り上げられた事件の身内ということで、あまり目立った行動は避けたいと思っていた。そのため、明日香は二次会への参加は控えることにしていたのだ。

「じゃあさ、ちょっとだけ付き合ってよ。久しぶりにこうして会えたのも何かの縁だろうから」

彼はそう言葉を紡ぐとにこりと微笑み、自然な動作で明日香の引き出物の袋に手を伸ばした。持つよ、という意思表示だろう。

「……っ」

思わぬ彼の提案に、明日香は反射的に身体を強張らせてしまう。肩にかけたクラッチバッグのチェーンを握り締めるてのひらが汗ばむのを感じ、鼓動が速まっていく。

「……お願い。少しだけでいいから」

懇願するように囁いた彼の声音には、どこか切実なものが滲んでいた。まっすぐに見つめてくる彼の黒い瞳に射抜かれ、胸の奥がほのかに熱くなる。

「……わかった。いいよ」

なぜだか明日香は、彼の誘いを断ることができなかった。せっかく会えたのだからもう少し話をしたいという気持ちもあった。

それに――彼がどうして自分のことを覚えていてくれたのか、知りたかった。明日香は誠司が初恋の相手だから、誠司のことを覚えていて当然だ。けれど、彼にとって自分は、たくさんいる知り合いのうちの一人にすぎないはずなのに。

ぽとりと心の中に落ちてきた何かの感触が、明日香の心をざわつかせる。

明日香が小さくうなずき受け入れると、彼は満足げに微笑み返し、エントランスへと明日香を導いていく。

「どこ行きたい？　……どこがいいかなぁ」

エントランスを抜け、回転ドアを一緒にくぐり抜けると、彼は顎に手を当てながら思

案しているようだった。

正直、明日香にはこのあたりの土地勘がない。明日香が住んでいるのはここから電車で五駅ほど離れている場所なので、このあたりの地理をまったくと言っていいほど把握していないからだ。

「せいじくんが……行きたいところでいいよ？」

明日香がそう答えると、彼は少しだけ驚いた表情を見せた。

「え……でも」

「私はどこでも大丈夫」

「ほんと？」

「うん」

明日香がこくりと首肯すると、彼は少し考え込むようにして視線を宙に彷徨わせたあと、「じゃあ」と口を開いた。

「実は俺もこのあたりはよくわかってなくてね。明日から関西に出張だから、駅前の大通りのホテルに部屋をとってるんだ。ルームサービスとかもあるし、俺が泊まる部屋で飲もうか」

「え……？」

思いもしなかった彼の提案に、明日香は目を見開いた。

女性を部屋に誘う——それは、いわゆる「そういうお誘い」ではないのだろうか。

けれど、彼の口調はどこか軽やかで、下心のようなものは感じられない。明日香の表情を見遣った彼は苦笑いしながら小さく肩を竦めた。

「あ、そんなつもりはないよ。なんなら、近くのバーでもいいと思ってた。だけど、明日香ちゃん、靴擦れできてるよ？」

「え……あ」

指摘されて初めて気が付いたが、確かに右足の踵が痛むような気がした。思わず身体を捻って足元に視線を落とすと、足首の後ろの部分が赤く腫れ上がっている。

明日香はそのことに驚き、思わず目を瞬かせた。

——美知代さんに選んでもらってから初めて履いたから……かしら……？

そんな様子に気付いてくれただけでも嬉しいと思う反面、そこまで見抜かれていたことへの恥ずかしさもこみ上げてくる。

「だから、靴を脱いでも大丈夫なところがいいかと思ってるんだけど」

彼の言葉を聞き、明日香は彼の優しさに触れたような気がした。思わず頬が緩んでいく。昔から彼はこういう人だったと思い出し懐かしく感じると同時に、きっと特定の誰かではなく、誰にでも優しいのだろうと想像できて、少しだけ寂しく感じてしまう。

「俺の部屋に来るの、嫌？」

「い、嫌じゃない……けど」

明日香が慌てて否定しようとすると、彼はふっと優しく笑う。艶やかなその表情に、胸がどくりと大きく高鳴った。明日香は咄嗟に胸元を押さえる。

今まで経験したことのない感情が次々と湧き上がってくることに戸惑ってしまう。

——いい……のかな……？

今の自分が、彼のそばで同じ空間をともに過ごしてよいのだろうか。身なりからも、彼はやはり今でも上流階級に身を置いているのだろうと察せられる。

全身の血流が激しくなっているのがわかる。どうしようもなく息苦しくて仕方がなかった。こんなことは生まれて初めてだった。

——せっかく会えたんだから……ちょっとだけ、なら。

明日香は戸惑いながら彼を見上げると、視線が合った彼は再びにこりと微笑んだ。明日香は自分の心臓を落ち着かせようと小さく深呼吸をする。

「……うん。そうしてもらえたら助かる」

靴擦れの痛みを堪えながらお酒を飲むよりは、誰かの部屋でゆっくり休ませてもらった方が断然楽に決まっている。彼の申し出をありがたく受け入れることにした明日香はこくりとうなずくと、彼は嬉しそうに破顔した。

「じゃあ、決まりだ。ちょっと歩くから、タクシー呼ぼう」

明日香が控えめにうなずくと、彼はほっとした表情を見せ、目の前の道路に停車しているタクシーに声をかけた。

豪華で幻想的なシャンデリアに、優美な文様の毛足の長い絨毯。窓のカーテンを開けると、宝石箱をひっくり返したような夜景を見渡せる。

バルコニーはプライベート感を味わうことができるテラス式になっているようで、全体がライトアップされ、テーブルとチェアセットの幻想的な陰影を浮かび上がらせていた。

リビングルームとベッドルームに分かれた室内は、五十平米ほどのシックな内装が施されていて、ダブルベッドが置かれたセミスイートルームだ。翌日の出張に便利だからという理由でこのクラスの部屋を予約するなど、やはり彼は明日香の記憶の通り、どこかの大企業のご令息なのだろう。

「とりあえず座って。絆創膏、持ってる？」

「あ……うん、持ってるから大丈夫。お手洗い、借りていい？」

明日香の申し出に、壁掛けテレビの横のミニバーにある冷蔵庫からシャンパンを取り出そうとしている彼が手を止めた。手に持ったシャンパンの瓶を置き、明日香の背後にあるドアを指差す。

「お手洗いじゃなくてそっちのベッドルームでいいよ。絆創膏貼るならそっちの方が絶対にいいから。ベッドも使っていいよ」

「えっ、あ……うん、ありがとう……」

彼の気配りに明日香は小さく頭を下げた。お手洗いで脱ぎ着するよりは、ベッドルームを借りる方が衛生的だろう。泊まるわけでもないのに申し訳ないという感情を抱きながらも、明日香はクロークに預けていた普段使いのバッグからポーチを取り出して、隣のベッドルームに向かう。

ベッドに浅く腰掛けてストッキングを脱ぐと、靴擦れは見た目よりも軽いもので、今のところ水ぶくれはできていないことがわかった。ほっと胸を撫でおろした明日香は傷口を絆創膏で覆い、彼が待つリビングルームへと戻る。

「お帰り。ひとまずシャンパンを入れてるけど……明日香ちゃん、まだお酒いけそう？」

リビングルームでは、ガラス天板のローテーブルにワイングラスが置かれていて、シャンパンの泡がゆらゆらと立ちのぼっていた。

ルームサービス用のメニューもしっかりと広げられており、彼の手際の良さに明日香は感嘆のため息を落とす。

「うん、大丈夫。何から何までありがとう」

彼に促されるままにソファに沈み込むと、彼も同じソファに腰を下ろした。

グラスを持ち上げた彼が、それを明日香に差し出していく。チン、と軽やかな音をさせながら乾杯のシャンパンを口に含むと、爽やかな炭酸が口内を満たしていく。

甘すぎず辛くない、絶妙なバランスのアルコール度数。我知らず「美味しい」と小さく呟いた声が思いのほか弾んでいて、明日香は自分が思った以上に緊張していたことに気が付いた。

「あの。今更こんなこと聞くのもあれだけど……せいじくんって、名前の漢字、どう書くの……？」

おずおずとした明日香の問いかけに、彼は一瞬目を丸くして、それからくすりと笑みをこぼした。

「あぁ、そっか。ごめん。そういや、昔、教えてなかったな」

グラスを置いた彼は、人差し指を立てて天井を指し示す。男性にしてはしなやかで長いその指先が、くるりと宙を描いていく。

「新選組の大旗に描かれてる誠。それから、司る、で……誠司。誠実であるように、って由来があるらしい」

そう言ってやわらかく微笑んだ彼の表情はひどく穏やかだ。けれどどこか艶めいていて、明日香は心臓が大きく跳ね上がるのを感じた。見惚れてしまった自分を誤魔化すようにそっと視線を落とす。

「そっか。昔からいい名前だなって思ってたけど、由来を聞くとますますそう思っちゃう」

誠司の顔を見ないまま息継ぎさえせず、一気に言葉を吐き出した。気恥ずかしさを覚えていたせいもあるが、それ以上に彼を直視できなかったのだ。

心の奥にじわりと広がっていくなんとも言えない感情に視線を彷徨わせると、テーブルに広げられたルームサービスのメニュー表が視界に飛び込んでくる。そこに記された『ローズマリーフィズ』というカクテルの名前に、明日香は思わず目を奪われてしまった。

「ローズマリーのお酒なんて、あるんだ」

ぽつりとこぼれ落ちた独り言のような明日香の声に、誠司は「あぁ」と小さく声を落とす。

「昔、ローズマリーで明日香ちゃんに花冠作ったのを覚えてる。懐かしいな」

「えっ、覚えてくれていたの？」

まさかそんな昔のことを、しかも十年以上前の小さな出来事を彼がここまで鮮明に記憶しているとは想像すらしておらず、明日香は驚きのあまりグラスを滑らせてしまいそうになり、慌てて指先に力を入れた。

「もちろん。だって、すごく綺麗だったからね」

誠司は優しい声で言葉を紡ぎ、深くなった夜のような目をふっと細める。そのまなざしがあまりにも艶やかに思えて、明日香は鼓動がどくりと大きく脈打つのを自覚した。

慌てて話題を切り替えようと、テーブルの上のメニューを手に取る。
「誠司くんは、今は何してるの？」
メニュー表を膝の上に置いて、明日香は努めて平静を装い誠司へ問いを投げかけた。
誠司は少しだけ考え込むような仕草を見せたあと、ゆっくりと唇を開く。
「端的に言えば、父さんの助手……かな。大学を卒業してから、自社のグループ企業を回ってる父さんの手伝いをしてるよ」
「へぇ、そうなんだ。すごいなぁ」
彼は明日香の三つ年上だったと記憶している。社会人となってからずっと経営者の近くで仕事をしている彼は、創業一家の出身とはいえ優秀な人材なのだろうと察することができた。
明日香の相槌に、誠司は困ったように眉尻を下げて笑う。
「別に、すごくはないかなぁ。確かに一社の常務って立場を任されてるけど、今はまだ経営に大きく携わってるわけじゃないから」
彼が手に持っていたシャンパングラスの中身が、ちゃぷんと波紋を立てる。どこか寂しげな色を帯びた口調で紡がれる誠司の言葉は、謙遜なのか本音なのかわからない。それがなぜだか引っかかり、明日香は顔を上げて誠司を見つめた。
彼の父親の仕事を手伝うということは、将来を約束されたも同然だろう。それでも、

立ち読みサンプル
はここまで

明日香には彼の表情が、まるで行き場を失った子どものように思えた。
「俺からも……明日香ちゃんの今の生活のこととか聞いていい？」
こちらの反応を伺うように問いかけてきた誠司に、明日香ははっと我に返りこくりと首肯する。
「叔父の事件があってからは母方の親戚のところで暮らしていたけど、大学卒業後はこっちで一人暮らししてるの。今は……ノレーブっていう人材派遣会社の事務をやってるよ」
「あぁ！　この前、有名なストリートピアニストを起用してＣＭ打ってたあの会社？」
「えっ、あ、……うん、そう」
誠司が明日香の勤め先の企業を知っていることに驚きつつも、明日香は再度うなずいた。
明日香が勤めている会社は、中堅の総合人材派遣会社で、明日香は登録者たちの社会保険やそのほかの手続きのフォローを行う総務系を担当している。法律と隣り合わせの業務ではあるけれど、仕事内容自体はそれほど難しいものではなく、上司や同僚にも恵まれていると感じていた。
「私はただの事務職だから、現場の仕事はよくわからないんだけど……それでも毎日忙しくって」